
垂水百済はマイナスである

久木篁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

垂水百済はマイナスである

【Nコード】

N3050BA

【作者名】

久木篁

【あらすじ】

垂水百済はマイナスである。それは変えようのない現実だった。けれど不幸は望まない。幸福も望まない。無い無い、無い尽くし。凶悪な過負荷を携えながら、それでも信念を貫こうとする。これは喜劇かはたまた悲劇か。綻びだらけの人形劇の開幕です。

幼少期 1 何よりも異常な普通

幸福である人間は不幸を知っている。

不幸である人間は幸福を知っている。

幸福でも不幸でもない人間は、どちらも偽物であることを知っている。

たるみずくだら マイナス マイナス
垂水百済は不幸であり冷酷であり最凶であつた。

それは穢れに穢れた事実であり、歪みに歪んだ真実であり、壊れに壊れた現実であつた。

本来、過負荷として膿み落とされた者の境遇は、もはや語るまでもなく最低で最悪なものとなる。

しかし、百済は愛された。

憎しみとともに愛された。

悲しみとともに喜ばれた。

孤独とも虐待とも縁遠く、普通の子どもたちと同じように生活することが出来るのも、偏に彼の母親の愛情の賜物なのだろう。

けれど、過負荷は消えたわけではない。

与えられる異常な愛と過負荷ゆえの信念の狭間で、百済の精神と

肉体はゆつくりと、けれども確実に濁り、澱重なり、過負荷とすら呼べない『モノ』へと変貌していった。

箱庭総合病院。

検査入院という名目で連れて来られた百済は、検査の順番がやってくるまで託児室で時間を潰すように言いつかった。

百済は幼いながらも自覚していた。

遊具で遊ぶ『友達』と自分とは、どこか決定的で壊滅的な違いがあるのだと。

人形の手足を分解して無邪気に笑う女の子。

人形は悲鳴を上げないが、彼女の四肢を解体したらどんな声を上げるのだろうか。

喜色満面の顔で、他の子が作った積み木の家を破壊する男の子。

彼の家を家族ごと焼いたら、どんな顔をするのだろうか。

プラスチック製のすべり台の頂上で、頬杖を突きながらぼんやりと考える。

不幸というものを考える。自分に当て嵌めて考える。

百済には不幸というものが解らない。幸せというものが解らない。結局のところは人の価値観によるものだから答えなど無に等しいのだろうか。

母親に聞くという手も残ってはいるが「じゃあアンタは今幸せなの？ 不幸なの？」と逆に質問されてしまいそうだ。解らないから聞いているというのに。

お菓子をもらった。幸せ。

食べたせいで虫歯が出来た。不幸。

歯医者に行ったらシールをもらった。幸せ。

テレビに貼ったら怒られた。不幸。

死んだ。不幸？

生き返った。幸せ？

化物と呼ばれた。不幸？

強く抱きしめられた。幸せ？

それがどうした。

幸せだ不幸だと一喜一憂するのが人間だというのなら、自分はとも平坦な『ナニカ』なのか。

解らない分からない判らないわからないワカラナイ。

「ねー、早くすべってよー」

唐突に思考は遮られた。

後ろを振り返れば、黄色に近い茶髪の男の子が順番を待っていた。

「ああゴメン」

するするとすべり落ちる。

すぐに男の子も降りてきた。

「えへへ、ぼく、ひとよしぜんきちー！」

男の子はその名の通り人のよさそうな笑顔で名乗った。

「ふうん」

知っている。というか名札がついている。

だが服装から見て、検査を待っているわけではなさそうだ。

「ん」

胸に着けた名札を、善吉に見えるように差し出す。

書いたのは百済の母親だ。平仮名ではなく漢字で書いてあるのは誰に対する嫌がらせなのか。

善吉はしばらく名札を見ていたが、

「読めないよお」

『ぜんきち』 が たすけ を もとめてきた

「『たるみずくだら』と読むの」

『くだら』 は 答え を 教えた

用は済んだとばかりに、百済はその場を離れようとするも、

「一緒にあそぼーよー、くだらちゃん」

右袖を善吉に掴まれる。

「何で？」

「一緒に遊ぶと楽しいから！」

どうしたものか、と壁に掛けられた時計をちらりと見やる。
看護師が呼びに来ると言っていた時間までは、まだ大分余裕があった。

「……何して遊ぶ？」

「すべり台！」

「今さっきやったばかりだよね」

「面白いよねすべり台！」

百済のツツコミを華麗に無視し、手を繋いだまま上ろうとする。
人の話をあまり聞かない性格らしい。百済は何故か、傍若無人を地で行く自分の母親を連想してしまった。

「……まあ、いいけどね」

ため息を吐きつつも、どこか嫌いになれない不思議な少年に、百済は付き合うことにした。

これが、人吉善吉と垂水百済のファーストコンタクトの最初の出会い。

後に、一人の異常と、一人の過負荷の陰に立つこの少年たちは、

この時互いの運命が噛み合い、軋み始めたことなど知る由もなかった。

幼少期 2 完成と見た目幼女と負完全（前書き）

どうも、久木篁と申します。ネギまを凍結させて懲りずに手を出しています。優柔不断ですが末永いお付き合いを。

幼少期 2 完成と見た目幼女と負完全

無意味だと、考えることに意味がある。

無関係だと、唱えることに関係がある。

無価値だと、信じることに価値がある。

例え全てが無駄だったとしても、そう思わずにはいられない。

しばらく善吉とともに遊んでいた百済は、看護師に呼ばれて検査室へと向かっていた。

託児室を出る際、善吉が悲しげな顔をしていたが、帰りにまた寄ると約束すると喜色満面の表情に変わった。よくもまああれだけコロコロと変えられるものだと感じする一方で、疑うということを知らない。愚かしさすら感じる純真な精神に呆れてしまう。

「まあ、どうでもいいけどね」

所詮は今日会ったばかりの他人だ。
当然、約束も守るつもりはなかった。

心の底から幸せそうな笑顔。

怒りは沸かない。

悲しみは募らない。
憎しみは生まれない。

ただ、理解に苦しむ。

「……どうでもいいけどね」

噛み締めて、吐き捨てるように再び呟く。

そもそも、どうして自分はあるな遊びに付き合おうなどと思ったのだろうか。

上っでは降りて、上っでは降りての繰り返し。何が面白い。そういうものだと理解していても、その行為に意味も価値も見出せない。

結局のところ、この世界は

「『キミにとって無意味で』『無関係で』『無価値なモノなんだね』

」

唐突に。

切り取られたページを、無理矢理挿し入れたかのような不自然さで。

その少年は、百済の前に現れた。

伸ばし放題の、色素の薄い頭髪。

小脇に抱えたウサギのぬいぐるみはツギハギだらけで、首が千切れかけている。

何より異質で際立っていたのは、こちらを見据える目だった。
血のように濁り、泥のように深く、夜のように黒く輝いている。

名札には『くまがわみそぎ』とあった。

言葉を交わす必要はなかった。

一目でわかる。

コイツは、人間として既に破綻している。

完全に壊れており、それが完成形として完了している。

けれど、その気持ち悪さが酷く心地よい。

「……その通りといえばその通りだけど、少なくともお前のように悲観も諦観もしていないつもりだよ」

「『へえ』『キミには僕が悲観や諦観しているように見えるんだ?』」

「違うのか？ 最初にお前を見たときは、同類を見つけたような暗い期待に満ちた目をしていたけど、今は敵意　というより嫌悪しか感じない。それは僕がお前のように不幸を望んでいなくて、この世界に対して正負を問わず何の感情も抱いていないと気付いたからじゃないのか？」

この『くまがわ』の心の根底には、世界は無意味で無関係で無価値であり、ならば何をして問題はないという退廃的思想・破壊願望が深く根付いている。

しかし、百済は主義思想など持ち合わせてはいない。興味すらない。

例え本当に、世界が無意味で無関係で無価値なのだとしても、そこからどうしようという思考には至らないのだ。

だから何だ。

それがどうした。

そこでスッパリと切り捨てる。

間違いを正さず。

歪みを直さず。

あるがままを受け流し、放棄する。

「『……やれやれ』『二人目は失敗かあ』『異常ばかりを集める病院と聞いたから少しは期待したんだけど』」

言葉とは裏腹に、『くまがわ』の顔には気味の悪い笑みしか浮かんでいない。

「『残念だなあ』『キミとはいい友達になれると思ったのに』」

「お前と傷の舐め合いをしろと？ 御免だね」

百済も鮫のような乱杭歯をむき出しにして嗤う。球磨川とは別種の、けれど根源を同じとする壮絶な笑み。^{マイナス}

この場に第三者がいれば、少年たちの背後に、身を絡ませ合いながら互いに呑みこもうとする二匹の蛇を幻視しただろう。

「『僕たちは』『生まれながらの負け組だよ』」

「知ったこっちゃないね。僕は勝とうが負けようがどうでもいい。」

それ以前に、勝負する気も興味もない」

「『僕は』^{マイナス}『敗北者だ』」

「ああ、僕も失格者だ」^{マイナス}

「『僕はキミが嫌いだ』」

「僕もお前が嫌いだ」

だから

「『だからとても気分がいい』」

両者はしばらく無言のまま睨み合っていたが、どちらからともなく歩き始め、すれ違い、けれど一言も発することはなく、振り返ることもなかった。

「いらつしゃい垂水百済くん。そこに座って楽にしてね」

百済が指示された検査室の中に入ると、白衣を纏った人物が話しかけてきた。

椅子に腰かけ、信じられないものでも見るような目で少女を観察する。

外見年齢は、三歳児である百済よりもいくらか上 小学校高学

年くらいだろうか。

黄味がかった茶髪という、つい最近というか数分前まで見ていた特徴的な髪をリボンで一つに束ねている。

首から上げた身分証には『人吉瞳』の名とともに顔写真が記載されている。

そこまではいい。

問題は名前の隣に印字された年齢の欄。

心療外科 人吉瞳（29）

ギリギリ二十代だからまだ若いとか、そういうレベルの問題ではない。というか名字から分かったが善吉の母親なのか？ 一児の母には到底見えないとかそれ以前に結婚可能な年齢には見えない。彼女の夫はどんな思いで結婚したのだろうか。

「？ どうかした？」

「いえ、別に」

不思議そうに首を傾げる仕草が、これまた年不相応に似合っている。まう。

百済は思わずため息を吐いた。

「将来苦労するだろうな、善吉も」

「……善吉くんを知ってるの？」

独り言のつもりだったのだが、息子の名が出たのを不審に思ったのだろうか。

人吉女史は訝しげな顔で百済を見据え、身構えている。

「託児室にいた、先生と同じ髪色の男の子でしょう？ さっきまで一緒に遊んでたんです。心配しなくても、泣かせるような真似はしてませんよ」

「……そう」

今度はどこかホツとした表情になる。親子揃って百面相が得意なのだろうか。

「それじゃあ改めまして、キミの担当医になる人吉瞳です。それで百済くんはどうしてこの病院に連れて来られたか分かる？」

「僕が普通の子とは違うからですよ。何処がどうとは言いませんが」

この病院を訪れたときから感じていた違和感。

患者のほとんどが、百済と同年代の子どもであったこと。

そして何より、共感覚とでも言えばいいのだろうか、自分と同種の匂いを感じるのだ。

「この病院は、僕のような異常者を集めているんですね」

どうでもいいですけど、と確信を突く百済の言葉に、人吉女史は目を見開いた。

これまでも大勢の異常と接してきたのだろうが、自分のような存在に遭遇するのはせいぜい二度目といったところだろう。

「それで？ 先生から見て、異常な僕には入院が必要なんですか」

入院したところで改善するとは思えないが、一応尋ねる。

「……キミの中ではもう答えが出ているんでしょう？ 私にキミは治せない。患者に治そうとする意志がない限り、医者は何もできない」

苦笑する人吉女史。その笑みは、無力な自分に向けた嘲笑なのだろうか。

「最後に一つだけ質問していい？」

「僕に答えられるものなら」

「垂水百済くん。キミは 幸せになりたい？」

百済は考えるような素振りをして、

「興味ありませんね、そんなもの」

言い切った。

そして席を立ち、検査室を後にする。

その際、入り口で足を止め、人吉女史に振り向くと、

「僕からも最後に一つだけ。先生の最後の患者として 僕は合格ですか？」

答えは必要なかった。

ただ、背後で微かに聞こえた「失格よ」という呟きに、百済は満

足げな笑みを浮かべるのだった。

約束を守るつもりはなかったが、時間が余っていたこともあり、百済はずるとやる気のない足取りで託児室に戻った。

途中、少女を見かけなかったか何人かの職員に尋ねられたが、知るわけもないので少女の特徴だけ聞き流した。

さてさて、あの純朴少年は何をしているのかと中を覗けば、善吉の他にオカッパ頭の少女がいた。

少女は黙々と知恵の輪を解いていき、傍らに積んでいく。善吉はそれをキラキラした目で見つめている。

後姿からでも感じる少女の異常性に興味を抱いた百済は、扉に身体を預けて二人のやり取りをしばらくの間観察することにした。

「……これで全部だ」

「わぁ、すごいすごい！」

淡々とした様子で解いた知恵の輪を放り捨てる少女とは裏腹に、善吉は目に見えてはしゃいでいる。

「次はコレできる!？」

それだけでは飽き足らず、六十四面のルービックキューブを持ち出してきた。

託児室の隅にある知育玩具の山に目をやれば、明らかに幼児向け

ではないパズルも多く混ざっている。この託児室も、異常を選別する振るいの役目をしているらしい。

次はアレ、次はソレと絶え間なくパズルを差し出す善吉に対し、少女はつまらなそうな表情を崩すことなく解いていく。

「あつ、百済ちゃん！」

やがてパズルもなくなり、百済も見飽きたところで善吉がこちらに気付いた。

善吉は百済の元に駆け寄ると、

「百済ちゃん百済ちゃん、めだかちゃんってスゴいんだよ！ 頭良
いんだよ！ 僕が出来なかったパズルとか全部解いちゃうんだから
！」

「ああうん、ソリヤヨカッタネー、メダカチャンツテダレー？」

興奮冷めやらぬ様子でまくし立てる善吉に、明後日の方を向いて棒読みの台詞で返す百済。そのまま手を引かれて少女の隣に座らされる。

「めだかちゃん、僕の友達の百済ちゃんだよ！」

「そうか」

「……ども」

挨拶とすら呼べない初会話。

全てにおいて達観 諦観していそうな少女と、周囲が熱くなれ

ばなるほど冷める性格である百済としては、これでもお互いにコミュニケーションを取ろうと頑張った方だろう。

「……………」

「……………」

それ以上会話が続かない。

善吉が何やら騒いで飛び跳ねているが、異常な二人は黙ったままだ。

百済はすることがなかったので、再びパズルに挑戦し始めた善吉を適当にあしらいながら、めだかというの名であるらしい少女を観察することにした。

服装は、シンプルながらも金のかかっていそうな意匠のワンピース。

顔立ちは整っていて、今のところ異性に興味のない百済でも将来は絶世の美人になると分かる。

けれどその表情は相変わらずの不機嫌　　というより全てに対して興味を失っているようだ。

こんな顔を見ていると、さっき会ったあの少年に言われた台詞が思い出される。

「……世界は無意味で無関係で無価値なモノ、か」

「　　っ！　貴様、それを何処で！」

それまで沈黙を貫いていたためだだったが、百済が何となく口に

した言葉に過敏なほど反応した。
その様子で百済は確信した。

この少女も、アイツに出遭ってしまったのだと。

「とある負け犬が僕に言ったんだよ。そのあと友達になろうとか言いだしたから丁重にお断りしたけど。あいつとは二度と遭いたくないね」

「……そうか」

めだかは初めて感情らしい感情を顔に表した。
それは戸惑いであり、躊躇いであり、恥じらいだった。

パズルを解いているときから、めだかの異常性にはおおよその見当がついていた。

その異常性ゆえに、今まで自分に分からないことなどなかったのだろう。

だが、この病院に連れて来られて、あの少年に出遭い、一つの真理を刻み付けられた。

その真理が間違っているとは決して思えない。百済も少なからず同感だからだ。だからこそ、あの場で否定も肯定もしなかった。

「貴様は、生きていることに価値があると思うか？ 生まれたことに意味があると思うか？」

平坦な口調で、けれど肯定を望む、すがりつくような感情が見え隠れする声音で、めだかが問うてきた。

「……さあてね」

百済は虚飾も誇張もなく、簡潔に自分の考えを述べた。

「その価値とか意味とかは、自分で見つけなきゃならないものなのか？ 絶対に他人の手を借りちゃいけないものなのか？」

「どういうことだ？」

「傍目八目、難しいと思える問題ほど案外他人の方が答えを知っているものさ。まあ結局――」

そう言つて、ようやく知恵の輪を解いた善吉を手招きする。

「偶には他人を頼るのも悪くないってこと」

「なーに百済ちゃん？」

「めだかちゃんがさ、僕とめだかちゃんが生きていることや生まれたことに何の意味もないって言うんだけど、善吉くんはどう思う？」

そう言えば本人を名前で呼ぶのは初めてだな、と思いつつ、善吉にも意見を求めた。

めだかも、何を言い出すのかと呆れ顔ではあったが、無言のまま待っている。

そして、善吉の回答は。

「うーん、この世に意味のないことなんてないと思うなー」

「……………だつたら、だつたら私に教えるがよい。私は一体何のた
めに生まれてきた？」

「あはつ、そんなの簡単だよ。百済ちゃんは一緒に遊んでくれて、
めだかちゃんもパズルを解いてくれて、会ったばかりの僕をこんな
に嬉しい気持ちにしてくれたんだもの。だから二人とも」

そして、善吉は被っていたフードを下ろして断言する。

「二人ともきつと、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ
！」

屈託のない笑みは、めだかの心を融き解すことができたのだろう
か。

百済は隣を窺った。

「う　　わあああああああん！　　あああああああん
！」

めだかは泣いていた。悲しみの涙ではない。これは　喜びの涙。
百済と善吉に抱き着いて、人目を憚らずに大声で。
年相応の女の子らしい泣き顔だった。

「百済ちゃん、めだかちゃんはどーして泣いてるの？」

抱き着かれたまま、自分が泣かせたのだと勘違いしているらしい
善吉も何故か既に泣き顔だ。

「いや違つから。これは嬉しくて泣いてるの。だから善吉くんも泣くなつて」

同じく身動きの取れないまま、泣いている友人二人を泣き止ませるのに百済が苦労したのはまた別の話。

垂水百済は、これ以上 否、これ以下ない負完全と出遭い。
完全無欠の完成と出会い。
掛け替えのない友人を得た。

けれど、百済はマイナスである。
強きを偽り、弱きを騙る人でなし。
歪んだ道化はどんな悲喜劇を演じるのか。

設定（前書き）

思いつき次第、後付けしていきます。

設定

名前

垂水 百済 たるみず くだら

年齢

17歳

所属

二年十二組

服装

制服の下にパーカーを着用し、フードを被っている。

特徴

瘦身長躯・ウルフヘア・信用できない笑顔・鮫のような乱杭歯

通称・蔑称

『詐欺師』 『嘘つき村の住人』 『まねきねこ招忌猫』 『こくしびよう黒死猫』

信条

強きを偽り、弱きを騙る。

好きなもの

約束

嫌いなもの

特になし（嘘）

特技

奇術・人間観察・異常察知（直観的なもの）
アブノーマル

使用武器

大小様々な大量のメス

以下ネタバレ注意・読み飛ばしをオススメ

本
名

安心院 不和

あじむ ふわ

経歴

七億人の悪平等の一人から生まれた。

生まれると同時に母親は死んだが、安心院なじみの目に留まり、夢の中で息子 過負荷でありながら純粹培養の悪平等として教育された。

現在は、他の悪平等からの援助を得て生活している。

小学校入学の時点で、なじみの『媚暴録』メモリーダストによって精神・肉体の負の記憶と『凶星惨禍』に関する記憶を封印される。

しかし、中学の球磨川による傷害事件をきっかけに、記憶を戻される。

能力

『アッドワード
既述死』

百済が持つ『凶星惨禍』の一部を切り取ったもの。体験したことがある死因から肉体及び精神が学習し、耐性を持つようになる。不老不死、傷が瞬間回復するというわけではなく、あくまで『死なない』だけである。

応用編として、体内に大量の武器や奇術のタネを仕込むことが出来る。

『ディザスター
凶星惨禍』

百済が本来持つ、自爆系巻き込み型過負荷^{スキル}。

百済が今まで受けてきた負傷や病気、精神的ストレスなど、ありとあらゆる負の事象を自分を含めた周囲の人間にも強制的に体験させる。

オンオフのみ可能で、百済本人にもどうなるか予測や制御ができず、完全に無差別。必然的に、百済が傷を負えば負うほどパターンや規模は増し、体験は累積する。

『メモリーダスト 媚暴録』

なじみの一京分の一のスキル。

対象者の記憶を弄るとともに肉体も作り変えることができる。

傷を受けたという記憶を消去すれば、実際に身体の傷も消える。

在りもしない記憶を植え付けることはできず、あくまで本来の記憶を基に作り変えることや、完全消去・封印しかできない。

百済（不和）に使用する際は『口写し^{リップサービス}』のようにキスをするが、本来は相手の素肌に触れるだけでいいため、彼女なりの愛情の現れでもある。

備考

身体中に火傷や古傷があり、特殊メイクで隠している。

幸福にも、マイナスの大前提である『他人の不幸』にすら興味が
ない。

他人の強さにも興味がないため、日之影空洞の『ミスターアンノウン
を無効化できる。知られざる英雄』

幼少期 3 不好きと、あと変態（前書き）

書いていて思ったけれど、コイツら本当に幼児か？

幼少期 3 不幸好きと、あと変態

不幸を望むなら、自分のために生きることを買け。

幸福を望むなら、自分のために死ぬことを買け。

どちらも望まぬのなら、他人のために生きることを買け。

「くーだーらーちゃん！ あーそーぼー！」

「……はいはい」

玄関で大声を上げている善吉と、おそらく いや確実にいるだろめだかの元に百済は向かう。

病院での一件があつて以来、善吉とめだかは四六時中一緒にいるようになり、何故か百済もその輪に巻き込まれることが多かった。

今日も今日とて教えた覚えのない百済の自宅に二人が押しかけ、遊べ遊べと喧しい。

三人揃つての遊び場所といえば、これまでは出会いの場所であつた病院の託児室だったのだが、やはりと言おうかなんと言おうか、めだかの「此処は狭くて飽きたぞ！」の一言で、『遊び場』の範囲は極端に拡大した。

具体的には、どこかの研究施設の広大な実験室や、ともに泊まれば費用は億を超えるだろうホテルの屋上プールなど、思い切り何

かが間違っているものばかりだ。

「お待たせいたしましたーっと」

「む、遅いぞ百済！ 呼んだらすぐに来い！」

仁王立ちのまま腕組みをして、百済を叱咤するめだか。

他人の家の玄関で、どうしてそこまで偉そうにできるのだろう。というか、以前から言っているのだが、事前に連絡くらいは入れてほしい。

「ごめんごめん。今の今まで寝てたからさあ」

パジャマ姿のまま応対に出たのはせめてもの抵抗だ。

「そうなのか？ 私は戦隊ヒーローを見て気分は最高だぞ！」

「僕もー！」

そう言って、擬音で表すならシャキン！ とおそらくはそのヒーローのものであるう決めポーズを取る二人。

寝起きなのにとっても疲れた気分になった百済は、寝癖だらけの頭を掻きながら「着替えてくるからもう少し待って」と言い残し、部屋に戻った。

洋服ダンスから、白い無地の長袖シャツと黒のズボンを引っ張り出して着用する。

洗面所で寝癖に水をかけて適当に直し、頭に巻いた包帯が乱れていないか確認する。途中でキッチンに寄り、買い置きしていた惣菜パンを子ども用栄養ドリンクで胃に流し込む。三歳児らしからぬ朝食ではあるが致し方ない。

休日は朝から晩まで遊ぶことも珍しくなかったため、留守電に伝言を残し、玄関に向かった。

上がり框に座って足をバタバタさせていた二人の背に声を掛ける。

「……ほんで？ 今日はどこで遊ぶ？」

基本的に、百済は遊び場にこだわりを持たない。

善吉は三人で遊ぶのがよほど嬉しいのか、どこであろうと元気いっぱいに遊び回る。

必然的に決定権はめだかに回ってくるのだが、黒神財閥の令嬢ともなればその常識・観念はどこかぶっ飛んでいる。

「ふむ、今日は私の家で遊ぶぞ！」

だが、今日の提案はいつもの突拍子もないものに比べれば幾分まとも……なのだろうか。

「やったー！ 百済ちゃん、めだかちゃんの家ってスッゴイ大きいんだよ！」

「感想が漠然としすぎていて逆に想像できないよ善吉^{ぜんき}ちゃん」

見たことはないが、それは大きいだろう。黒神グループの会長宅なのだから。

「でも遠いんじゃないの？ 行き来にあまり時間かけたくないんだけど」

近くにあるのなら噂になっっていないわけがないし、百済が暮らす

極普通の住宅地にそんな豪邸があるのなら目立つ以前に違和感しか感じない。

「それは問題ないぞ！」

いつの間にか外に出ていたためだが、パチリと指を鳴らす。それを合図に烈風を巻き上げて上空に現れたのは漆黒のボディを持つ大型の

「……軍用ヘリっスか」

「わーいヘリコプターだー！」

目をキラキラさせているところ悪いのだけれど善吉くん。キミは本当にあれに乗る気なのかい？
タンDEMローターの轟音で、近隣の住民が何事かと窓から顔を出している。悪目立ちしすぎだった。

「大体、どこに着陸させる気だよ。そんなスペースないでしょ」

百済の自宅前の道路は、車二台がギリギリすれ違えるほどの幅しかない。機体そのものは何とか収まるだろうがローター部分は間違いない家屋を直撃する。

「ふふん、愚問だな百済よ。この私がそのことに考えが及ばなかったとしても？」

「むしろこれ以上何か考えがあるのかと思うと不安で仕方がないよ」

「まあいい。善吉、百済、早く乗るがよい！」

そしてヘリから垂らされる縄梯子。

躊躇いなく足を掛け、上ってゆくめだか。

イヤナヨカンから、トテツモナクイヤナカクシンに変わった。

「いやいやいや無理だから。僕三歳、キミたち二歳。おわかり？」

「百済ちゃん、はやくー！」

「善吉っちゃんも素直に上らないで！」

二人とも行動力ありすぎだから、という百済の叫びは轟音で掻き消された。

兎にも角にも、善吉もああでは仕方がない。二人と出会ってからもはや癖となりつつあるため息を吐きつつ、百済も縄梯子に足を掛けた。

それと同時に梯子の巻き上げを開始するヘリ。

『さあ、私の家へ向かうぞ！』

「とりあえずスピーカーで話すのをやめてほしいなあ」

ウィーン、と巻き上げられながら、明日からのご近所付き合いに苦勞しそうだと、現実逃避気味に主婦じみた考えで辟易する百済であった。

「ねっ！？ スッゴイ大きいでしょ！？」

「ああうん、ソウダネー」

着陸したヘリの窓から外を覗く。

黒神グループ。

世界有数の大財閥、その会長宅なのだから、世間一般の常識に当てはまらないような豪邸に住んでいるのだろうという百済の予想は概ね当たっていた。

しかし、

「限度つてあるだろうに……」

百済の住まう一軒家など十や二十は余裕で入ってしまうような洋風建築は、屋敷ではなくもはや城に近い。

広大な野原は、めだかに言わせれば「ただ広いだけでつまらない」ものであるらしく、屋敷の後方にも同じ規模で広がっているらしい。その野原をぐるりと取り囲むのは戦車でも打ち崩すことが不可能な厚さと高さを持つ鉄扉と城壁だ。

「……要塞かよ」

「何を呆けている。早く降りるぞ！」

めだかに急かされてヘリを降りる。

足元に広がるのは屋敷の玄関まで延びるレッドカーペット。その

両脇にはずらりと並んだメイドさんと執事さん。

『お帰りなさいませお嬢様！』

一系乱れぬ動きで一礼するメイドさんと執事さん。

めだかはそれに軽く手を挙げて応え、善吉に至つては暢気に「こんにちはー」と挨拶している。

「……もういいや」

人生は諦めが肝心、というのは誰の言葉だったか。

善吉に背中を押される形で、百済は黒神宅に足を踏み入れた。

内部も絢爛豪華の一言に尽きるのだが、頭が痛くなつてきた百済は早々に観察するのを諦めた。

通されたのはめだかの自室であるらしい。

子供部屋らしからぬ内装ではあったが、ぽつりと飾られているビスクドールや掛けられた子供服が、かろうじてめだかのために用意された部屋であることを教えている。

「さあ、遊ぶぞ！」

どこからか大量のボードゲームを引っ張り出すめだか。

箱庭病院であれだけの知育玩具をいとも簡単に解いていためだかにとって、文字通り兎戯に等しいものなのだろうが、三人でできる遊びとして彼女なりに考えた結果なのだろう。

場所は異常だが、遊びの内容は至極まともであることに百済は安堵するのだった。

「……にしても広すぎだろうよこの家」

善吉とめだかがオセロをし始め、百済も傍らでそれを眺めていた。だが、長丁場になりそうな雰囲気。めだかが善吉に合わせてレベ
ルを落としていたため。だったので、めだかに一言「散歩してく
る」と伝えて部屋を出たのだ。

それがいけなかった。

「迷ったねーこりゃ」

口に出しても虚しさが増大する一方だ。
道を聞こうにも、十数分歩いて誰とも出会わない。

「玄関からめだかちゃんの部屋までの道は覚えているから……まずは玄関でも探すか」

とりあえず迷路脱出の定石として『左手の法則』を実行することにした。これは壁に左手をつき、壁に沿って進んでいけばいずれは出口に辿り着くというものなのだが。

「他人様の家の中で使う羽目になるとは思わなかったよ」

愚痴りつつも進んでゆくと、一際異質な扉の前に辿り着いた。
鎖で幾重にも囲い、いくつもの南京錠で封印された重厚な造りだ。

押し開けてみると、どうにか子ども一人が通れるくらいの隙間ができた。

「……中に人がいれば御の字か」

隙間に身体を捻じ込む。

「ここは……図書室か？」

百済の目に飛び込んできたのは、大量の本、本、本の山。大人の背丈の倍はある本棚にはみっしりと本が収まっている。それも専門家しか理解できないような難解な学術書ばかりで、百済の知る図書館のような安らぎなどの多幸感はない。

照明の類がないため薄暗く。

あるのは全身に襲い掛かる負の重圧。

この部屋全体が不幸を望んでいるかのような、粘り　纏わりつく執念が百済には酷くむず痒い。

本棚の合間を縫うように進んでいく。途中、積み重なった本や乱暴に丸め捨てられた紙屑などがいくつも放置されていた。

どうやら、この部屋を使用している人間は片付けには興味がない性格であるらしい。

それが、彼女だ。

部屋のほぼ中央、唯一照明のついた机にかじりつき、鬼気迫る表情で狂ったようにペンを走らせている少女がいた。身体を鎖で縛りつけた拷問の如きスタイルで、脇目も振らず一心不乱に学業に励む姿は一種の造形美として百済の肌を粟立たせた。

百済は少女に声を掛けることもなく、本の山の一つに腰かけた。
少女は百済に気付いていないのか、それとも意識して無視を決め込んでいるのかは分からないが、ペンの音だけが響く空間の中、互いに無言のまま時間だけが過ぎて行った。

「おいテメエ」

「んん？」

二十分ほど経ち、百済が何故かあった奇術の指南書を半分ほど読み終えたところで。

少女らしからぬ口調で呼びかけられた。

百済がページから視線を移すと、少女がこちらを睨んでいる。

「さっきから視界の端で鬱陶しいんだよ。邪魔だからとっとと失せろ」

「そりや確かに、先客のお前に挨拶も許可も取らなかったのは悪いと思うさ。けど、それがどうかしたか？」

百済も乱暴な口調で、少女を睨み返す。

「鎖で縛られているお前にとって、僕はそんなに気を取られるような存在なのかよ、ああ？」

少女は苦虫を噛み潰したような顔をしたが、それ以上は何も言わず再び机に向かい始めた。

百済は本を元の場所に戻すと、出入り口ではなく、少女の隣に歩み寄る。

上から紙面を覗き込むと、そこには無数の数式や遺伝子配列、薬の化学式らしきものが延々と羅列してあった。

「はっ、さっぱりわかんねえや」

「……当たり前だ。テメエみたいなお気楽で幸せそうな奴に解けるものじゃない」

「へえ、そう見えるか？」

「私は幸福を嫌悪する、忌避する、拒絶する。楽しむことはなまけることだ。喜ぶことはだらけることだ。笑うことは不真面目なことだ。歴史上の天才の^{ことごと}くが不遇の人生を送っている。偉大な発明や発見のほとんどが劣等感から生まれている。素晴らしいものは地獄からしか生まれない！」

少女は両手を机に叩きつけた。それだけでは飽き足らず、積み重ねていた本を蹴り飛ばし、時計や水差しを叩き落とす。

「それに比べてこの私はどうだ！？ 恵まれた生まれ恵まれた容姿恵まれた才能恵まれた環境！ クソ喰らえだ！ こんな幸福のままじゃ私は駄目になる！ もっと苦しみなきゃ、もっと追い込まれなきゃダメだ！ もっと地獄を、もっともっと地獄を！」

形振り構わず物に当り散らす少女。

その姿に、欲望に。
不幸の何たるかを知らないド素人の醜態に。
百済は殺意を覚えた。

「そこまでしとけよ不幸もどきが」

唐突に、少女の右腕に鋭い痛みが走った。

手首から肘の辺りに掛けて、無数の細かい切り傷が出来ていたのだ。今暴れたために出来たものではない。いずれもそう深くはないものではあったが、それらは少女の動きを止めるには十分な役割を果たす。

突如現れた傷に困惑する少女の隙を逃さず、百済は少女を椅子ごと全力で蹴り飛ばした。

鎖に繋がれていたため、少女は机の上に吊るされる形となる。

百済は机に飛び乗り、少女に覆いかぶさる。

左手は少女の首を握り、右手は袖口から取り出したメスを掴んで、少女の琥珀色に輝く瞳の数ミリ手前に突き立てた。

「……いいこと教えてやる。今までお前がどんな不幸を経験してきたか知らないけどな、そんなもんは不幸ですらねえよ。本当の地獄がどんなものか見たことがあんのか？ 自分の断末魔を聞いたことは？ 屍臭を嗅いだことは？ 生きながら身を焼かれたことは？ 骨という骨を砕かれたことは？ 不幸が味わった地獄のほんの一端ほくたち

でも見たいっつーんならその綺麗な両の目ン玉抉って素敵で愉快な光景たっぷり見せてやんよ」

ぎりぎりと左手に力を込める。

少女が腕を引っ掻いてこようがお構いなしだ。

友人の家族だろうが知ったことか。

「　　つか、がつ、が、はっ！」

「素晴らしいものは地獄から生まれる？　地獄からは最低と最悪しか生まれねえよ！　世界の天才や偉人は不遇の人生を送っている？　お前の頭ん中にご本人降臨して囁きでもしてんのか？　ボクノジンセイハフコウデシター、ワタシノジンセイハサイテイデシター。お前ひとりの価値観で他人の人生の良し悪し決めつけてんじゃねえよ」

そこまで言っつて、百済はようやく手を離し、机から下りた。

「ゲホッ、ケホッ！　ガッ、ゲホッ！」

少女が咳き込み、涎を垂らしながらも百済を視線で射殺そうとする。

「本当に　　正真正銘の不幸なら、発見や発明なんか出来やしねえよ。這い上がる余地なんて微塵もなく、ただひたすら滑稽に、見るも無残に堕ちていくだけだ」

「……なら」

掠れた声で少女は問う。

「なら私はどうしたらいい!? これ以上ない偉人アフノーマルになるために、私はどうしたらいいんだ!? 教えてくれよ!」

「……………めだかちゃんめだかちゃんならお前もお前だな。いくら姉妹でも余計なところまで似すぎだ」

あれだけ濃密だった殺意は嘘のように消え去り、のんびりとした動きで少女に手を伸ばす。

少女は思わず目を閉じるが、訪れたのは痛みではなく、頭を優しく撫でられる感触。

「何でもかんでも一人で背負いすぎだっつもの。天才たちだって理解者がいたから死ぬまでやってこれたんだろうが。お前も友達でも作ってそいつを頼れよ」

基本的な解決にはなっていない。おまけに他人任せ。格好のつかない答えであった。

けれど、

「デメエ、結構バカだろ」

救われた。

「まあ、お前に比べたらそうだな」

「……………でも、ありがとな」

聞こえないほど小さな声で呟き、一筋の涙を流しながら、糸が切

れたように少女は眠りについた。

「……………あ、帰り道聞くの忘れた」

水面を漂うような感覚と柔らかな熱で、黒神くじらは目を覚ました。

視界に映るのは、滅多に見ることがなかった自宅の廊下と、誰かの背中。

自分は今、背負われているのだとすぐに理解した。

「やっと起きたか。つかお前軽すぎ。食うもん食わないと背も伸びねえぞ?」

聞き覚えのある声。

何故だか無性に恥ずかしくなったくじらは、百済の肩から顔を離した。

「おいデメエ」

「お前それ女の言葉遣いじゃねえぞ。ついでにデメエじゃねえ。垂水百済つつー立派な名前があるっつの」

「ああそうかよ。私にもくじらって名前がある。それで垂み………
…百済、どうして私をおぶっているんだ？」

「名前呼び捨てかよ……まあいいけど。お前に帰り道を聞こうと思っ
てな。起きるまで待つのも、放っておくのもアレだったし、何と
なく？」

「帰り道って……百済、もしかして迷子か？」

百済は答えない。けれど全身から『それは言っなオーラ』が撒き
散らされている。

「へえ　ふうん」

にやり、とくじらの顔に意地の悪そうな笑みが浮かぶ。

「迷ってたんだあ。私にあんなこと言っというてガキっぽい」

「三歳だからガキでいいんだよ、落とすぞコラ」

「あーあ、じゃあこの優しい大人なくじらさんが仕方なく教えて
やるよ。ちよっと止まれ」

「おや意外と親切。しかしその少女には裏の顔が　痛っ！」

「馬鹿なこと言っな。じゃあ……回れ右っ」

「暴力反対。つか方向逆かよ！」

ぶちぶち言いながら、反対方向に歩き始める百済。

「ところで百済はどうして私の家にいるんだ？」

「ほんとに今更だなその質問。めだかちゃんに誘われたんだよ。日曜の朝から叩き起こされてな」

突き当りを右に曲がり、広大な野原を窓から眺めながら進む。

「妹と……友達なのか？」

「あ？ あー、どうだろうな。家に誘うくらいだから、向こうは友達だと思ってるのか？」

「私が質問したんだろうが」

「友達の定義なんか知らねーって。お互いにそう思えばそうなんじゃないねえの？」

「……そついう、ものなのか」

「僕の主観だから信用できねえけどな」

その後、くじらは何も言わなくなった。ただ、ぶつぶつと低い声で呟いている。

少し怖いのを止めてほしいと百済は思った。

階段を下り、大広間の前を通り過ぎる。

くじらが再び口を開いたのは、別の階段を上がり、同じような扉がいくつも並ぶ廊下を進んでいるときだった。

「じゃ、じゃあ……さ」

「んー？」

「私も、その、と、友達になっていいか？」

消えてしまいそうな細い声。けれど、百済にははっきりと聞こえた。

聞こえはしたが、さっきの仕返しとばかりに聞き返す。

「あ？　なんだって？」

「こ、の……………と、友達に、なってください！」

見えないが、おそらくくじらの顔は真っ赤に染まっているだろう。

「オーケーオーケー、よく言えました」

「……………テメエ、性格最悪だな」

「親の教育がいいもので。んじゃあ、ほれ」

肩越しに右手を差し出す。

「何だ？」

「友好の証つーことで、とりあえず握手？」

「どうして疑問形なんだよ」

それでも、くじらは手を握り返した。

とても温かく　顔が綻ぶほど嬉しかった。

「ところで、めだかちゃんの部屋ってまだか？」

「あ、ああ。もう少し先、名前が扉に彫られてあるはずだから」

あれだ、とくじらがとある扉を指差した途端、それは内側から吹き飛ぶように開き、

砲弾の如き勢いで、少年のような『何か』が壁に激突した。

「……………」

百済、訳がわからず無言。

「……………」

くじら、顔を歪めて無言。

「ウ、フフ、フフフフフ。抱きついただけで正拳突きなんて手厳しいねめだかちゃん。けど大丈夫、お兄ちゃんには本心がちゃん」と伝わっているよ？　照れ隠しなんだねそうなんだね？　本当は嬉しいけどお友達の前だから恥ずかしかったんだね？　ああもうそんな照れ屋さんなめだかちゃんも可愛いなあ」

クネクネガクガクと痙攣しながら、呪言めいたことを口走る少年
っばい『何か』。

うわー、と百済はくじらを見やる。

くじらは、気まずそうに、けれどもあからさまに目を逸らした。

「あー、くじらさん？」

「……さつさと部屋に入って扉閉めて鍵かける」

「いやでもこの人……」

「いいから早く！」

言われたとおり、めだかの部屋に入って扉を閉めて鍵をかける。

「わー、お帰り百済ちゃん！」

「お姉様……？」

帰ってきた百済に善吉は喜び、めだかは背負われているくじらを
見て目を丸くした。

「百済ちゃん、お土産ある!？」

「ねえよ。んで？ 僕がいない間に何があったわけ？ 二人でオセ
ロしてたんだよね？」

百済はめだかに説明を求める。

とりあえず、部屋の外のいるアレがめだかに抱きついて殴り飛ばされたことまではわかっている。その前が知りたい。

「うむ。実は貴様が出て行った後、勝負は思いの他あっけなく着いてな。貴様が帰ってくるまで将棋やチェスもしていたのだ。そうしたらウチの変態兄貴が全速力で突っ込んだのだ。だから私はこんなこともあるつかと体得していた格闘術をもって」

「ちょっと待て。兄貴？」

「うん、めだかちゃんのお兄ちゃんの真黒さんだよ？」

話を遮った百済の疑問に、善吉と背中のかじらが答える。

「……あの変態的な物体Xの名称は黒神真黒。私たちの、尊敬できるかとても微妙な兄貴だよ」

確かに自分で『お兄ちゃん』とか言ってたなあアレ。

「つまり、黒神家は変なのがいっぱい居るんだな」

「「兄貴^{アレ}と一緒にするな！！！」」

しみじみ言う百済の頭を、めだかとくじらが同時に叩いた。

「にしても、締め出しちゃったけど本当に良かったのか？」

「ああ。この程度じゃまだ生温い方だし」

「お姉さまの言うとおりだ。いつもならこのまま兄貴の部屋まで引

き摺って閉じ込めて見張りを立てなければ心配なくらいだからな」

「どういう兄弟関係だよ」

「フッフ、めだかちゃんは愛情表現が少し過激なんだよ」

背後から聞こえてきた声に、百済はくじらを背負ったままその場から飛び退き、めだかに至っては完全に臨戦態勢に入っていた。

立っていたのは当然　黒神真黒。

めだかが日常茶飯事と言っただけあって、兄の耐久性もかなりのものであるらしい。

よくよく観察してみれば、確かに　男女の遺伝子的な骨格の差はあるものの　顔の造りがめだかやくじらによく似ていた。けれど、普通だ。

めだかのような、くじらのような異常性を感じない。

同じ親から生まれ、同じ環境で育って、妹たちだけ異常性が開花することなどあり得るのだろうか。

まあ、重度の妹愛も異常といえは異常だが。

「お兄様、鍵がかかっていたはずなのにどうやって……」

「それはねめだかちゃん。愛さえあれば妹の部屋の力ギなんか無に等しいからさ！」

いや意味わかんねえから。

扉を見れば、カギの部分が取っ手ごと分解されていた。
そこまでするか？

百済は真黒の深すぎる愛（業とも言つ）に戦慄した。

「おや、善吉くんの他にも見慣れない子がいるね？ キミもめだかちゃんのお友達かい？ 仲が良くていいねえ。けど僕のめだかちゃんに対する愛には及ばない。ああ自己紹介がまだだったね僕はめだかちゃんの兄の真黒だよ。好きなものは妹、大事なものは妹だ。本当はもう一人、くじらちゃんっていう愛すべき可愛い妹がいるのだけれどこれが少し　　ってくじらちゃゴハア！！」

「吐血してぶっ倒れた！？ 何で！？」

血の池に倒れ伏す真黒にツッコむ百済と、衝撃的な光景に涙目になる善吉。

黒神姉妹は冷静に　　というか虫ケラでも見る目つきになっている。

「く、くじらちゃん！」

バネ仕掛けのように飛び起きる真黒。

もう何も言うまい、と百済は傍観を決め込んだ。

「どうしたんだいくじらちゃん！？ 僕があれだけ説得しても書庫から一步も出なかったのにめだかちゃんの部屋にいて、し、しかもそんな素直な子猫のようにおんぶされてるだなんて！　くうう羨ましい！　羨ましすぎるぞ名前も知らないキミ！」

.....

くじらは無言のまま、百済の背中から跳び上がると

「ぜひ代わってくれさあ代わってくれ！　待つててなくじらちゃん、お兄ちゃんがすぐに最高のおんぶをしてあげるからねゲハアツ！」

見事な延髄蹴りを叩きこんだ。

吹き飛ぶほどの威力はないが、人体の構造と急所を熟知した、正に一撃必殺の破壊技だった。

そして反動を利用して体勢を整え、百済の背中に舞い戻る。

「……ところでお姉さま。いい加減、百済の背中から下りてくれませんか？」

「どうして？ 別にいいじゃないか、誰にも迷惑をかけたりしてないだろ？」

「百済が困った顔をしています。それになんだか私も不愉快です」

「何だ、嫉妬か？
んん？」

「是が非でも下りていただきます！」

「はっ、やれるもんならやってみろ！」

「お前から僕を挟んで喧嘩してんじゃねえええ！」

姉妹に前後を封じられて辟易する百濟。

「わーい、僕も混ざるー!」

「善吉っちゃんは少し空気読んで頼むから!」

「さあくじらちゃんめだかちゃん! お兄ちゃんの中はここだよ!」

「邪魔だ!」

「僕もおんぶー!」

「……………誰でもいいから止めてくれ」

友人の家に招かれ、日常を紡いだ。

不幸好きの少女と出会い、不幸を説いた。
妹好きの少年と出会い、変態を知った。

全てが夢であれば良かったと、今でも切に願う。

日常 1 ど・う・ぶ・つ・えん、だぁぁあつ！ byめだか

日常と非日常に、そう大差はない。

獣にとって、人間が生きていること自体非日常だからだ。

本日、俗にゴールデンウィークと呼ばれる連休の初日。

天気は快晴、降水確率0%。

絶好の行楽日和であった。

何処も彼処も親子連れで賑わい、騒がしいながらも和気藹々とした雰囲気満たされていた。

それはこの動物園も同様であった。

ただし、その入り口では既に一騒動起こってはいたが。

「さあ着いたぞ！ 動物たちを愛でて撫でて遊んでやろう！ 皆私に続くがよい！」

「待つてー！」

先陣を切って動物園に呐喊してゆくめだか。

その後を楽しそうに追いかける善吉。

「いつもの凜としためだかちゃんも可愛いけど、動物目当ての無邪気なめだかちゃんも可愛いなあゲフェッ！」

「邪魔だから前でグネグネしてんなよ馬鹿兄貴。つか私は勉強の途中だったんだがな」

深すぎる妹愛に悶える真黒。

兄の背を蹴り飛ばし睥睨するくじら。

そして最後に

「と言いつつさりげなく僕に負ぶさるのやめてくれねえかなくじらちゃん」

寝癖が残った頭を掻き、欠伸を噛み殺している百済。

なんとも個性的すぎるこの五人組も、休日ということで動物園に繰り出したのだ。

いつものように黒神家に招待された善吉と百済（輸送方法については既にご近所名物になっていたりするので割愛する）。

遊びの内容を決めようとしたのだが、偶然点いていたテレビにめだかが釘付けになった。

つられて見やれば、行楽地の特集をしているらしく、動物園を背景に、リポーターが通りかかった親子に話を聞いていた。

「動物園か……」

「百済ちゃんが行ったことある？」

「んー、去年幼稚園の遠足で行ったかな……。善吉っちゃん？」

「うん、お母さんと一緒に行ったことあるよ」

動物さんがいっぱいいたよー、と当たり前な感想を言う善吉。

あの瞳先生と一緒に？

百済は想像した。

善吉と手を繋いで動物園を歩く人吉女史……………どこから見ても姉と弟だった。

怖い絵になってしまった。

「いぞ」

「はい？」

黙ってテレビを見ていたためだかがぼつりと呟いた。

「私も動物園に行きたいぞー！」

「はあ、左様ですか」

何となく、今後の展開がどうなるか分かってしまった百済であった。

「こうして僕たちは動物園に来ることになったのでした、まる」

案の定、早朝から迎えに来ためだかたち一向。
予想できていたからといって早起きするような考えは百済にはなく、身だしなみを整えるのもそこそこに、用意された車に乗り込んだ。

「……何度も言うけどさ、限度とか常識とかあるだろうに」

ちらり、と今しがた降りた車を見る。

動物園に似つかわしくない黒塗りのリムジンが威風堂々と停車していた。

周囲には人ばかりができ、写真を撮る者まで現れる始末。撮ってどうしようというのか。

「動物以上に注目されてるし」

「百済くん、突っ立ってないで私らも行こう」

呆れていても仕方がない。

くじらに促されるまま、百済も動物園に足を踏み入れる。途中で変態っぽいものを踏んだような気がしたが、くじらが何も言わないのでスルーした。

「あれ？ めだかちゃんと善吉っちゃんは？」

中に入ると、先に行っただけの二人が見当たらない。

優しい善吉と理路整然としためだかの性格上、待っているものと思っていたのだが。

「大方興奮してあっちこっち走り回ってんだろ。さてと、私らはどれからにする？」

背後から肩越しに延ばされた手がパンフレットを広げる。

どれだけ文句を言っている、めだか同様楽しみではあるらしい。

「やっぱ爬虫類館は外せないよな。あとハシビロコウもいいな、あの近寄るなって目つきと雰囲気が好きだ」

動物のチョイスは少々微妙だが。

「一緒に見るのは決定事項なのね、まあいいけど。ほんじゃリクエストにお応えして爬虫類館から回りますか」

子供向けにやたらデフォルメされた地図を確認し、爬虫類館へ向かう。

ちなみに真黒はその場に放置した。放っておいても、余りある妹への愛とやらでめだかかくじらの元へ飛んでくるはずだ。即座に反撃されるだろうが。

「にしても人が多いな。思わず解剖したくなっちゃう？」

「笑って物騒なこと言ってんじゃねえよ、僕たちだって同じ立場だろうが。んなことより、僕はお前が来たことに驚いてんだけだな」

実は百済と出会った後も、くじらの不幸好きは治まることはなかった。

睡眠時間と食事をこれまでよりも多く取り、何故か百済が居る時に限ってはあったがめだかたちとも遊ぶようになった。けれど、それ以外の時は相変わらず書庫にこもり、机にかじりついて数式を

解く日々が続いていた。

気付いた点と言えば、勉強しているときの顔つきが幾分柔らかくなったことが百済には不思議だった。以前は強迫観念に駆られた鬼のような表情だったのだが、今はどこか余裕のあるものになっているのだ。

心境の変化でもあったのか、と一度聞いたことがある。
くじらの答えは、

『過去の偉人たちには理解者がいたから不幸ではないし孤独でもなかったんだろ？ だったら私にも必ず素晴らしいものを生み出せる。今ならそう確信できる。私にもちゃんというからな！』

というものだった。

よくは分からないが、自分の意見 あれは脅迫に近かったがを参考に、新たな考えに至ることが出来たのだと納得することにした。

「別に妹とばかり動物園に行くなんてズリーとかそういうのじゃなくてだな、たまたま、偶然にも今度の研究対象がこの動物園にいる猛獣だったんだ。都合がよかったからついてきた。特に深い意味はない、うん、ないんだ」

余談ではあるが、出かけることを聞いたくじらが、それまで着手していた研究をほっぽりだして動物対象の研究に切り替えたことは誰も知らない。

「お、着いたぞ？ 爬虫類館」

「外は結構普通なんだな」

「そりゃそうだろ」

密林を模した爬虫類館の内部は薄暗く、動物のいるガラス張りの檻だけが淡いライトで照らされていた。

独特の光沢をもつ鱗や瞳に、くじらは目を輝かせる。

「……一匹でもいいから欲しいな」

「お前だとペットというより動物実験に使いそうで怖いな」

「もちろんそれとは別にだ」

「実験動物は既にいるのかよ」

その後もカメレオンに餌やりをしたり、ニシキヘビに巻かれたりと濃い時間を過ごした。

「うあー、まぶしー」

薄明かりに慣れていた眼が、日光で眩む。

「次はハシビロコウだな」

「あのお前に雰囲気似てる鳥ね……………似てるって言えば、お前とめだかちゃんもそっくりだよな」

「……そんなに妹アイツと似てるのか？」

「ああ、目つきはお前の方が数倍凶悪だけど、顔とか偉そうな話し方とかはほとんど同じだな」

「……そうか、同じか」

何気なく振った話題なのだが、どういわけかくじらの機嫌が悪くなり、首に回された腕の力も強くなったような気がする。

「嫌だな」

「ん？」

「なんでもない」

どうかしたのかと立ち止まり、振り返るが、くじらは顔を伏せてしまっていて表情は分からない。

「気分が悪いなら休憩するか？」

「いい、大丈夫」

「んな不機嫌そうな声で大丈夫って言われても　っ！」

そこで百済は異変に気が付いた。

「くじらちゃん」

「だから大丈夫だって」

「そうじゃなくて……静かすぎないか？」

え？ とくじらも顔を上げて周囲を見回した。

道行く親子連れや風船を持ったマスコットキャラの着ぐるみ。

平々凡々とした動物園の一風景だ。

だが、そこにはあるべきものが、なければならぬものが欠落していた。

「動物が、いなくなってる？」

くじらの言葉通り、檻の中はもぬけの殻となっていた。

一つに近寄って見てみるが、鳴き声はおるか気配すら感じない。

二人の横を、ただならぬ様子の係員が無線機に喚きながら走っていく。

「どうする百済くん？」

「どうするもこうするも、ひとまず善吉っちゃんたちと合流しようぜ。真黒さんも……こっちにいないってことはめだかちゃんのことろにいるんだろうし」

入口からここまで会うことはなかった。ならばこのまま進んだ先に三人がいる可能性は高い。

百済はくじらを背負ったまま走り出した。

幸いにも、三人とはすぐに合流を果たせた。
だが、様子がおかしい。

あれだけはしゃいでいためだかは傍から見てもわかるくらいに落胆し、隣にいる善吉に話しかけられても肩を震わせるだけで何も言わない。

その善吉の顔も悲しげで、必死にめだかを慰めようとしている。

「兄貴、どういう状況なんだこれは？ 動物全員アブダクションでもされたのか？」

「くじらちゃん、一研究者としてその発想はどうかと思うぜ？」

くじらが、数歩離れたところに立っていた真黒に声を掛けた。

さすがに変態的行動は自重しているのか、苦笑を浮かべている。
いつものように

「ああ二人とも……実はこれはめだかちゃんが原因なんだ」

「アイツの？」

「めだかちゃんの圧倒的存在感 威圧感のせいで動物たちが怯えてしまったんだ」

「それでこの有様、ですか」

改めて、めだかの異常性には驚かされる。

万能であるがゆえに孤独で、完全であるがゆえに孤高で、完成しているがゆえに孤立する。

望んで生まれ持ったわけではないだろうに。

こうなれば異常も過負荷も大して変わらない。

「……しゃーねえな」

ため息を吐き、くじらを下ろす。

「百済くん？」

「僕なりにめだかちゃんを慰めてみるわ」

「何をする気だい？」

「まあ見ててください」

二人をその場に残し、めだかたちに歩み寄る。

「百済ちゃん……」

「百済あ……」

「ひどい顔だねえ二人とも。それはさておき」

めだかの背を押して、檻に近づける。

「グスッ……何のつもりだ百済。こんなことをしても動物が出てくるわけがないだろ」

「いいからそこで待ってなっ」

言い残し、何処かへ走っていく百済。
そのまま五分ほど経ったときだろうか。

動物園の至る所から悲鳴じみた鳴き声が響き始め、奥から動物たちが飛び出してきた。

「わあー、ライオンさんだー！」

善吉は両手を挙げて喜んでいるが、めだかは信じられないらしく呆けている。

ライオンはめだかに縋り付くような視線を投げかけ、自ら頭を垂れて服従の意を示した。

めだかが恐る恐る手を延ばして頭を撫でても、されるがままだ。

「善吉！ 触れたぞ！」

「よかったねーめだかちゃん！」

「一体何が……」

「百済くんが何かしたのは間違いないだろーけど」

くじらと真黒は顔を見合わせて首を捻る。

飛び出してきた動物たちがめだかを怖がっていないこともそうだが、何より二人の目には、そのどれもがめだかに助けを求めているように見えるのだ。

動物は人間に比べて正直だ。

弱肉強食。弱者は常に強者に従うことで己の身を守ろうとする。ならばこの場には、めだかよりも恐ろしい、めだかに助けを求め

たくなるような『何か』がいることになる。

「やってみるもんだねえ。ここまでとは思わなかったけど」

いつの間にか戻っていた百済が飄々と言う。

「百済くん、これはキミが？」

「ええまあ。裏に忍び込んで、ちょっと目を見ただけですよ？」

友達のためなら嫌われ者になるのも悪くない。
マイナス

そう呟く百済の笑みに、真黒は感謝すべきなのだろうが、何故か震えが止まらなかった。

帰りの車内。

動物と触れ合えたことがよほど嬉しかったのか、めだかの興奮はいまだに冷めることはなかった。

購入したぬいぐるみを抱きしめて、善吉と話し込んでいる。

「……百済くん」

「ん？」

車窓から外を眺めていた百済に、隣に座っていたくじらが話しかけてきた。

「さっき言ってたよな。友達のためなら嫌われ者になってもいいって」

「うん」

くじらはこてん、と百済の肩に頭を載せた。
柔らかな熱と、優しい香りが鼻腔をくすぐる。

「私は嫌わないからな」

「え？」

「百済くんが何をしても、誰にどう言われても、私は絶対に百済くんを嫌ったりはしないからな」

「……………」

静かに、けれど確固たる意志を秘めた口調。
ふざけて言い返す気は毛頭なかった。
ただ一言だけ、

「……………ありがとう」

そう呟くだけだった。

日常 2 百済、十一歳 別れと誓い（前書き）

ここから数話挟んで少し飛びます。飛ばします。カッ飛ばします。
飛ばさないと始まらん。

あと、感想をいただきました。

こんな駄文でも読んでくれる人がいると嬉しいものです。

日常 2 百済、十一歳 別れと誓い

絆。縁。誓い。約束。

守るべきもの。尊ぶべきもの。

時には楔となって胸を穿ち、鎖となって絞め殺す。

『私、この家を出ることにした』

「……そうかい。遅かれ早かれそうするだろうなとは思ってたけどよ………めだかちゃんや、真黒さんには？」

『言うわけないだろ？ あいつらなら絶対止めるだろうし。この日のために五年以上準備を重ねてきたんだ。例え百済くんが説得しても中止はしない』

「めだかちゃんが泣くぜ？」

『手紙も残したし、間違いなく泣くだろうな。その時は百済くんが慰めてやってくれ』

「そついつのあんま得意じゃねえんだよなあ」

『百済くんなら大丈夫さ。この私をここまで変えたんだからな』

「買い被り過ぎだって。ついでに真黒さんの足止めもしなきゃなんねえんだろ？ 間違いなく発狂して暴走すんぞあの人。考えただけで胃が痛えよ」

『……………前に、百済くんは言ったよな。私の求めている不幸は不幸ですらないって。だったら私はそれでもいい。黒神くじらではない新しい環境、新しい立場、新しい姿、新しい視点で私なりの不幸を探し出してみせる』

「何もかもまつさらにして、か？」

『ああ。家族の記憶も消す。大切だからこそ、幸福だからこそ、兄貴も妹も善吉も、もちろん百済くんとの思い出も 初めて会ったあの日のことも動物園に行ったことも全て消去する。それが今の私に思いつく最高の……………最悪の不幸だから』

「……………そうかよ」

『幻滅したか？ 百済くんからすれば見苦しいよな。記憶が無くなったところで、《私》が消えて不幸好きの《誰か》が残るだけなのに』

「どーして僕が幻滅しなきゃならねえんだ？ お前が必要だと思っただから、そうしたいと思ったからそうするんだろ？ だったら僕は肯定してやるよ。せいぜい不幸もどきを追いかけて、お前の言う素晴らしいものを生み出して、高笑いでもしながら僕に見せつけてみる」

『言われるまでもないさ。私は不幸を求め続ける。けど決して悲惨

じゃないし、孤独じゃない。どうしようもなく厳しくて、どうしようもなく優しい理解者がいるとわかっているから」

「……………」

『だから、だから一つだけ約束してくれ』

「僕に守れるような約束なんてそうそうないぜ？」

『もし、この先いつか《私》じゃない《誰か》に会った時、その《誰か》がとつもない愚か者で、《私》が望んだ結果とは違っていたとしても、絶対に《私》を好きでいてほしい』

「……………」

『《私》も百済くんが好きだ。友達としてではなく、異性として。それは《私》が《私》じゃなくなっても絶対に変わったりはしない。愛なんて理解できない不確かなものに賭けるのは研究者として失格なんだろうけど、それでもそう信じずにはられないんだ……………お願いだから、私を嫌いにならないで……………』

「……………ハア、守るのに苦労しそうな約束だなあおい」

『じゅめん』

「謝るくらいなら最初から言っただけじゃねえよ。わかったわかりました、誓ってやるよ。お前が誰で、どうなっていたとしても、僕はお前を肯定して受け入れて助けて護ってやる。記憶を失ってようが知ったことか。約束したからには嫌だったってても助けるからな？」

『……ありがとう』

「それと、お前も一つ約束しろ」

『？』

「何があっても、僕を信じろ」

『……うん約束する。今も、これからもずっと信じてるから』

じゃあ……。

さよなら、百済くん。

ああ……またな、くじらちゃん。

時が経つのは早い。

それは大人であろうと子どもであろうと変わることはない。
深々と降る雪の中を、少年が歩いている。

垂水百済、十一歳。小学六年生。

同年代の子供よりも頭一つ高い瘦躯。薄く雪の積もったウルフヘア。傷だらけのランドセルを背負い、真紅のマフラーを首に巻き、両手はコートのポケットに突っ込んでいる。

「……………ハア」

マフラーの隙間から白い息が漏れ、曇天の空に消えてゆく。
くじらも、この空の下を歩いているのだろうか。
電話を受けてから、十時間ほど経っていた。
どこへ行ったのかは百済にもわからない。

彼女が探究する不幸。彼女の言う素晴らしいもの。
それらは決して自分とは相容れないだろう。
確信にも似た予感があった。
それでも。

「受け入れてやるさ」

ふと視線を感じ、足を止めた。
道の向こうに、見覚えのある黒塗りのリムジンが停まっていた。
その前にめだかが立っている。自信に満ち溢れている凛とした仁王立ちではない。俯いてスカートの裾を握り、涙を堪えているようにも見える。

「どうした？ めだかちゃん」

聞かずともわかっているが。

「……お姉さまが、家を出て行った」

『幸せになるくらいなら死んだ方がマシだ』

「……………いや、いやいやいやいや！」

いくら何でも他に書き方あるでしょくじらちゃん！

あれだけ電話で大切な家族だの幸福だの言っていたのに！

渡された手紙に殴り書きされた文章は非常に簡素で、これでは家族を忌み嫌って家出したと思われるも仕方がない。というか、悪意しか感じられない。

不器用すぎでしょ、と呆れ果てる百済だったが、手紙の裏であるものを見つけ、苦笑した。

「百済、お姉さまは私を嫌っていたのか？」

袖をつまんでこちらを見上げているめだかの目には大粒の涙が溜まり、今にも零れ落ちそうになっている。

「私はお姉さまに迷惑をかけていたのか？ 勉強の邪魔をしてしまっていたのか？ 私は嬉しかった。お姉さまと一緒に遊べるのが嬉しかった。お姉さまが笑ってくれることが嬉しかった。だがその

せいでお姉さまが私を疎ましく感じて家を出て行かれてしまったのだとしたら！」

そこまで言つて、堪え切れなくなったのだらう。

小さく嗚咽が聞こえ、雫がカーペットに染みを作る。

「……慰めるのも、僕の役目ね」

承つてやるとしますか。

腰を屈めてめだかの目線に合わせ、そつと頭を撫でる。

完全無欠の異常性があつて大人びていたとしても、百済にとつてめだかは年下で小柄な少女でしかない。

愛情表現の仕方がわからない彼女が愛した妹。

「心配しなくても、お前のねーちゃんはそんなことで愛想尽かしたりしねえよ。少しばかり気持ちの伝え方が下手なだけさね。もし嫌いになつてたらこんな絵を残していつたりするかよ」

めだかに見せたのは、置き手紙の裏面。

そこに描かれていたのはめだか、くじら、小さく真黒、善吉、そして百済の五人が楽しそうに遊んでいる硬筆画。

紙面の片隅に、隠すように残したのは照れ臭かったからか。

「お姉さま……」

めだかは涙を拭い、手紙を両手で包み込んだ。

「百済、私は待つぞ。お姉さまと再会できる日を、何年、何十年だろうと待つてやる！」

「あー多分、そんなに待たなくてもそのうち会えると思うぜ？ 気は晴れたか？」

「うむ！ さつきよりは大分マシになった！」

「そいつあ結構。んで話はぐるっと変わるけどよ、あれは一体何してんだ？」

「

っ！

っ！

っ

！」

「ちよっ、真黒さん！ 落ち着いてくれって！」

百済が指差した先では、全身を鎖で縛られ、みの虫状態で猿轡を噛まされた真黒がビタンビタンジャランジャランと豪快に飛び跳ねている。それをロデオマシーンさながらに必死で抑えているのは、最近体格とともに男らしい口調になってきた善吉だ。

「私が今朝起きたときには既にこの状態だった。おそらくお姉さまの仕業だとは思うが」

寝込みを襲われたか、はたまた微笑みのひとつでも喰らって悶死した隙を突かれたか。どちらにしろ、あの真黒を油断させるのは簡単だっただろう。

「……くじらちゃんが家出したことは？」

「手紙を読んだときは気が動転していてな、つい話してしまった。鎖をほくとどうなるかわからんから、そのままにしている」

「せめて会話にくらい参加させてやれよ。かなり大きな家族問題だろーが」

「言語が支離滅裂で文章として成立していなくてな。鬱陶しいので黙らせた」

……だから、お前ら姉妹の中で真黒の評価ってどうなってんの？

「まあ、縛ったままにしたのは賢明な判断だけだな」

あんな血走った目の真黒など自由にしたが最後、黒神グループの総力を　どんな手を使ってでもくじらを探し出そうとするだろう。用意周到なくじらのことだから、世界有数の財閥の力をもってしてもそう簡単に見つかるとは思えないが、助けると約束した手前、せめて少しでも身を隠す時間を稼いでやらなければ。

「　　っ！」

「二人とも暢気に話してないで手伝ってくれよ、俺だけじゃ無理だつてー！」

善吉の悲鳴が木霊する。

「よし、ゆくぞ百濟！」

すっかり元の調子に戻ったためだかに満足しながら、

「……メンドクセーなあおい」

今どこかで不幸を探している少女に、再会したら文句の一つでも言っ
てやろうと心に誓う百済だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3050ba/>

垂水百済はマイナスである

2012年1月10日23時47分発行